

「文末焦点の原則」について*

時 崎 久 夫

0. はじめに

本稿では、文の焦点は一般に文末にくるという、文末焦点の原則について、prosody と syntax 両方の面から考察する。まず第1節では、この原則のもとになっていると思われる従来の研究を概観する。次に第2節では、そのような考え方では説明できないと思われる例を示し、問題提起を行う。第3節では、2で提示した問題について再考し、第4節ではそれをもとに、英語の文の可能な情報構造の型を示す。結論としては、文末焦点の原則はすべての文にあてはまるものではないということを述べる。

1. 文末焦点の原則

まず文末焦点の原則を明示したものとして、次の(1)を出発点としよう。

(1) *End-Focus* :

English sentences normally have *end-focus*, which means that the last open-class item in the sentence is often the most prominent.

(Aarts & Aarts, 1982, p. 96)

すなわち、英語の文では通常、文の最後の大範疇要素が最も卓立しており、文の焦点となるというものである。具体例として次の文を見ることにしよう。

- (2) a. Robert is driving to LONDON
- b. Robert is driving TO London (not through London)
- c. Robert is DRIVING to London (not flying to London)
- d. ROBERT is driving to London (not Jack)

(Aarts & Aarts, 1982, p. 96)

(a) では文末の London に文強勢があり、文の焦点となっている。これに対して (b) から (d) では、文強勢が文末以外の要素に置かれており、括弧に示したような対照

を表すと言われている。すなわち(2)では (a) が無標であり、(b) から (d) が有標であるとする考え方である。

この 'end-focus' という用語は Quick et al. (1972, p. 938) のもので、「文末焦点」というのは村田 (1982, p. 191) の訳語であるが、こうした考え方は Halliday (1967) や Chomsky (1970) など多くに共通して見られる。⁽¹⁾ とくに Chomsky (1970 p. 70 fn. 21) ではこの文末焦点と Chomsky and Halle (1968 p. 90) の核強勢規則 (Nuclear Stress Rule, 以下 NSR と略) とを関連づけている。この NSR は、1つの句の右端に第1強勢を与えて、他の強勢をすべて自動的に一段階格下げする規則であるが、ここでは Liberman and Prince (1977) による韻律理論の表記法を用いることにする。

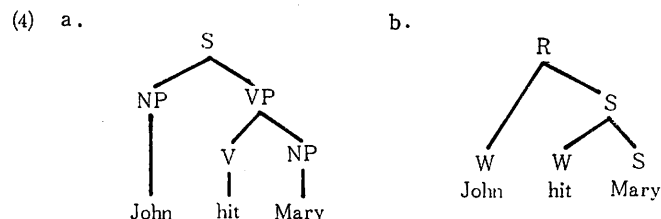
(3) Metrical Version of NSR and CSR :

In a configuration [_CA B_C]:

- a. NSR : If C is a phrasal category, B is strong.
- b. CSR : If C is a lexical category, B is strong iff it branches.

(Liberman & Prince, 1977, p. 257)

この NSR (3a) を (4a) の例文に適用すると (4b) の韻律構造が得られる。⁽²⁾



(4b) では NSR によって文末の Mary に第1強勢がきており、文末焦点の原則と一致する。Chomsky は、このように NSR で予測される、文末に主強勢がくる形を 'normal intonation' と呼んで無標の場合と考えている。そしてこの NSR の適用をもっと簡略化したと思われるのが Gundel (1974) の強勢配置規則(5)である。

- (5) Stress Placement — assign primary stress to the rightmost non-variable element in S.

(Gundel, 1974, p. 54)

すなわち文末に主強勢を置けというものであり、ここではこうした考え方を文末強勢と呼んでおくことにする。

こうした文末焦点、文末強勢の原則に関連すると思われるのは、Kuno (1979) などと言う「旧から新の原理」である。これは談話の流れをスムーズにするために、文の中では旧情報を前に置き、新情報を後に置くというものである。具体例を見ていくことにしよう。

- (6) a. John gave a book to the boy.
 b. John gave the boy a book.
- (7) a. John gave the book to a boy.
 b. ??John gave a boy the book.

(Kuno, 1979, pp. 280-81)

英語には (6a) を (6b) に変える与格移動変形があると言われる。これは「旧から新の原理」に従って、旧情報 the boy を新情報 a book の前に出したものであり、(7) ではこの原理を破って新情報 a boy を旧情報 the book の前に出したために不自然な文になっている、というのが Kuno の主張である。この「旧から新の原理」は与格移動変形だけでなく、受動化、話題化など多くの変形規則について言えるもので、ここで問題とする文末焦点の原則と関連していると思われる。⁽³⁾

以上この節では、文末焦点、文末強勢、および旧から新の原理について概観した。まとめれば、文の焦点と文強勢は文末の要素にあり、変形規則はこの文末焦点の形をつくるために作用するという考え方であると言えよう。

2. 文末焦点に対する問題点

2.1. この節ではこうした考え方では説明できないと思われる3種類の例をあげ、検討する。まず最初に次の例を考えることにしよう。

- (8) a. John saw the PLAY yesterday.
 b. John saw the play YESTERDAY. (Halliday, 1967, p. 206)
- (9) a. The SUN is shining.
 b. The sun is SHINING. (Gundel, 1974, p. 115)
- (10) The case was judged.
 a. Then a LAWYER appeared.
 b. *Then a lawyer APPEARED (Guéron, 1980, p. 659)

上の3つの例では (a) が文末以外に文強勢がある場合で、(b) が文末強勢の場合である。しかしこうした文では (a) の方が (b) よりも 'normal' であると言われている。言いかえれば、対照を表すのは (a) ではなく (b) だということである。例えば (8b) では劇を見たのはおとといではなくきのうだったのだとか、(9b) では太陽

はかくれているのではなく照っているのだとかいった対照が感じられると言われる。また(10)の文脈では文末強勢の(10b)は非文となっていることも注目される。以上のような例は文末焦点、文末強勢を無標の場合とする考え方に反すると思われる。

2.2. 第2は、文末焦点、文末強勢という考え方では文末以外にも焦点、文強勢がある場合を説明できないという問題である。文末焦点の原則によれば、1つの文には1つの焦点ということになるが、以下のような多重焦点(multiple foci)の文例が実際には数多く存在する。⁽⁴⁾

- (11) ALEXANDER kissed MARY. (Kuno, 1972, p. 298)
(12) In TRENTON, / a courtroom SPECTATOR / killed a Mercer County
JUDGE / with a HAMMER. (Bing, 1981, p. 15)

この問題に対する説明として、文末以外は対照強勢(contrastive stress)であることが考えられるがこれにも問題がある。対照強勢の1例である(2d)は(13)の前提を必要とするが、これに対し上の(12)は(14)のような前提を必要としないからである。

- (13) Someone is driving to London.
(14) Somewhere, someone killed someone with something.

対照強勢というのは、何らかの前提があって、それに何かを対照させるという場合であるから、(11)(12)のような例は対照強勢だとは言えないと思われる。とすればこのような例はどう考えたらいのか、これが第2の問題点である。

2.3. 第3の問題点は、文末焦点の原則に反するような変形規則が存在するということである。そのおもな例として次を見よう。⁽⁵⁾

- (15) a. JOHN he called. (Gundel, 1974, p. 134)
b. He called John.
(16) a. Fried EELS I like to eat.
b. I like to eat fried eels. (Downing, 1970, p. 48)
(17) a. Over the HILL Peter Rabbit ran.
b. Peter Rabbit ran over the hill. (Rochemont, 1978, p. 24)
(18) a. It's more TIME / that we NEEDED.
b. We need more time.
(19) a. More TIME / is what we NEEDED.
b. We need more time. (Leech & Svartvik, 1975, p. 180)

これらの例では(b)がもとの構造であり、これに変形規則を適用して派生したのが(a)の形である。(15)(16)ではNPが、(17)ではPPが前置されて強調されている。また(18)は分裂文、(19)は擬似分裂文の左右を入れかえた形で、どちらも文の焦点はmore timeである。

これらの文では焦点の句を左へ移動しており、文末焦点の原則に違反していると思われる。もしこの原則が正しいのなら、それぞれ基底の(b)の形においてすでに文末に焦点の句があるのにそれをわざわざ移動するということは考えられないはずである。またこの問題は「旧から新の原理」にもあてはまると思われる。Kuno (1979, p. 282)は、わざわざ変形をかけてこの原理を破るものを‘active violation’と呼び、談話文法によって排除されるとしている。1で見た(7)がその例であるが、(15)から(19)の例はまさにこの‘active violation’にあたるものである。ではなぜこのような変形あるいは構文が存在するのであろうか。これが第3の問題点である。⁽⁶⁾

以上この節では文末焦点の原則に対して、‘normal intonation’、多重焦点、原則違反の変形という3つの問題点を指摘した。

3. 仮説による説明

この節では前節で提示した3つの問題に対して、最近のイントネーション研究および機能主義的研究をもとに解決法をさぐることにする。

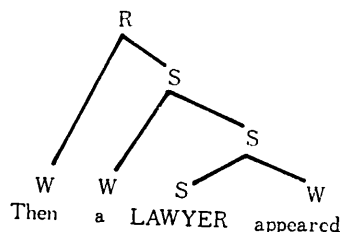
3.1. まず第1の‘normal intonation’の問題についてはすでに音韻論の分野で Schmerling (1976), Ladd (1980), Bing (1979) などの研究がある。そこでこれについてはBingの説明をとりあげるのとどめたい。

Bingは韻律理論をもとに、(20)のNP Prominence Principleを提示している。

- (20) *Noun Phrase Prominence*: A node in metrical structure which corresponds to a node in syntactic structure which is a noun phrase cannot be dominated by any node labelled *Weak* except when that node has been destressed because of reference to previous discourse. (Bing, 1979, p. 179)

これはすなわち、名詞句は先行談話によって強勢を失わない限り‘weak’にはならないというものである。これを(10a)にあてはめてみれば(20)のようになる。

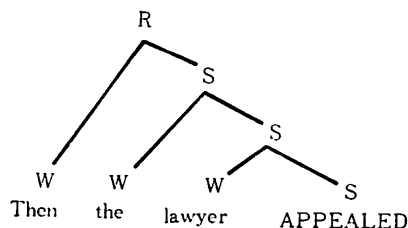
(2)



(2)の a lawyer は新情報であり、先行談話に現れていないので 'weak' ではなく 'strong' を与えられ、結果として文強勢をもつのである。これに対して(2)のような場合には、その韻律構造は(2)のようになる。

(2) A lawyer appeared. The case was judged. Then the lawyer APPEALED.

(3)



この場合 the lawyer は旧情報であるために 'destress' され、'weak' になるのである。さらにこの 'destress' によって、ちょうどシーソーのような仕組みで動詞の appeared に 'strong' が付与され文強勢をになうというのが Bing の主張である。(7)

このように考えてくると、新情報を表す名詞句は文強勢をもつということが一般に言えると思われる。さらに(9)(10)のように文全体が新情報を表す文でも文強勢は新情報の名詞句にいくと言えるであろう。そこでここでは Bing の原則(2)を次のように簡略化して、仮説として提示しておきたい。

(24) New NP Prominence

A noun phrase which represents new information receives primary stress.

すなわち、新情報を表す名詞句は第1強勢をもつというものである。これにより(9)(10)

のような例は説明できると思われる。(8)

3.2. 次に2番目の問題点を検討することにしよう。多重焦点の文はどう考えるかという問題であるが、これに対しては上の(24)の仮説と音韻句 (phonological phrase) を考えることで解決すると思われる。音韻句というのは Chomsky and Halle (1968) の用語であるが、これは Halliday (1967) の 'tone-group', Selkirk (1978) の 'intonational phrase' などに相当するものである。第2節であげた(12)の例では1つの文が4つの音韻句に分かれていた。文末焦点、文末強勢という言い方はこの例にあてはまらないわけであるから、文よりも音韻句を基本的な単位として考える必要があると思われる。実際 Halliday は 'tone-group' を 'information unit' と結びつけており、1つの文が1つの 'unit' から成る場合を無標とし、2つ以上の 'unit' から成る場合もあると述べている。

- (25) a. John saw the play yesterday.
- b. John / saw the play yesterday.
- c. John / saw the play / yesterday. (Halliday, 1967, p. 201)

この例では (a) が無標とされているが、どのようにして 'unit' の数やその切れ目の位置が決まるかについては明確に述べられてはいないようである。詳しい議論をする余裕はないが、音韻句の数はその文に含まれている新情報の数と関係していると考えられる。例えば(25)の例では、どこで、誰が、誰を、何で、という4つの新情報名詞句があり、それに対応して4つの音韻句に分かれているからである。また(25)のような短い文で、the play だけが重要であるなら、Halliday の言うように (a) の1つの音韻句が適切であろう。しかし、もし次の(26)(27)のように主語名詞句あるいは副詞句が長くなり、それぞれ1つの新情報を表す場合ならば、それに応じて2つあるいは3つの音韻句に分かれるのが自然であると思われる。

- (26) John McKENROE / saw the PLAY yesterday.
- (27) John McKENROE / saw the PLAY / yesterday EVENING.

そこでここでは2番目の仮説として(26)を提示することにする。

(28) Phonological Phrasing

A sentence is divided into some phonological phrases so that each phrase involves a new information.

すなわち1つの文はいくつかの音韻句に分かれており、各々が1つの新情報を含んで

[注]

- * 本稿は、日本英文学会北海道支部第29回大会（1984年10月7日、北海道大学）での口頭発表、及び1985年1月に北海道大学に提出した修士論文“Prosody and Focus in English: On the End-Focus Principle”に基づいて執筆したものである。
- (1) Halliday (1967, p. 207) は“unmarked and marked focus”と呼んでいる。
- (2) (4b)において、R は‘root’, S は‘strong’, W は‘weak’を表す。
- (3) Creider (1979, p. 11) は多くの変形を、左方移動と右方移動とに分け、左方移動規則は話題化規則 (Topicalizing Rule) であり、すべての焦点化規則 (Focusing Rule) は構成素を右に (文末に) 移動させるという2つの一般化を述べている。
- (4) 多重焦点 (multiple foci) というのは Jackendoff (1972, p. 260) の用語である。また(1)の例は Kuno が中立叙述 (neutral description) と呼んでいるもので、What happened then? のような文につづく、前提をもたない文である。(2)の斜線 (/) は音韻句の切れ目 (phonological boundary) を示す。
- (5) 大文字の語の上の印は音調を表す。ˊは上昇、ˋは下降、ˊˋは下降・上昇である。
- (6) このような焦点前置の例に加えて、右方転位 (Right Dislocation) による話題 (topic) の後置も文末焦点の反例となるかもしれない。これについては第4節でふれる。
- (7) この仕組みは Ladd (1980) の Deaccenting と Default Accent であり、Bing (1979) は Ladd の博士論文 (1978) をもとにしている。
- (8) (8a) の例では the play を新情報と考えれば(2)の説明できるかと思われる。しかし、この例文にはいくつかの問題が関係しているように思われるので、ここで議論はさけることにする。
- (9) 英語の音韻句の決定については Downing (1970) が詳しい。しかし彼が扱っているのは主に Obligatory Phrasing であり、ここで関係するような Variable Phrasing についてはあまりふれられていない。後者については Selkirk (1978) が興味深い。
- (10) (2)の規則の定式化にあたっては、Rochemont (1978, p. 38) の文体規則を参考にした。これらは焦点の NP, PP を後置するものである。
- (11) 英語の情報構造については Kuno (1972), Inoue (1982) を参照されたい。Inoue (pp. 280-81) は3つの構造が可能だとしている。
- i) a. OLD NĒW
b. NĒW OLD
c. *OLD NEW

- d. *NEW OLD
e. *NEW ÓLD
f. *ÓLD NEW
g. NEW NĒW

しかし (g) では2つの NEW が両方とも強勢をもち、次のようになるはずである。

- ii) NĒW / NĒW

(12) ここでは (37a) も対照の場合と考えていることに注意されたい。

[参考文献]

- Aarts, F. and J. Aarts. 1982. *English Syntactic Structures*. Oxford: Pergamon Press.
- Bing, J. 1979. *Aspects of English Prosody*. Ph.D. dissertation, Univ. of Massachusetts. Reproduced by GLSA.
- . 1981. “The Given / New Distinction and the Unmarked Stress Pattern,” *NELS* 11, 13-21.
- Bolinger, D. 1965. *Forms of English: Accent, Morpheme, Order*. I. Abe and T. Kanekiyo (eds.). Tokyo: Hokuo Pub.
- Chomsky, N. 1970. “Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation,” in R. Jakobson and S. Kawamoto (eds.). *Studies in General and Oriental Linguistics: Presented to Shirō Hattori on the Occasion of His Sixtieth Birthday*. Tokyo: TEC, 52-91. Also in Chomsky (1972), 62-119.
- . 1972. *Studies on Semantics in Generative Grammar*. The Hague: Mouton.
- . and M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Creider, C. 1979. “On the Explanation of Transformations,” in T. Givón (ed.) *Syntax and Semantics, vol. 12. Discourse and Syntax*. New York: Academic Press.
- Downing, B. 1970. *Syntactic Structure and Phonological Phrasing in English*. Ph. D. dissertation, Univ. of Texas at Austin. Ann Arbor, Michigan: University Microfilms International.
- Givón, T. 1983. “Topic Continuity in Spoken English,” in T. Givón (ed.) *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. TSL vol. 3. Amsterdam: John Benjamins. 343-63.
- Guéron, J. 1980. “On the Syntax and Semantics of PP Extraposition,” *Linguistic Inquiry* 11: 4, 637-78.

- Gundel, J. 1974. *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*. Reproduced by IULC, 1977.
- Halliday, M. A. K. 1967. "Notes on Transitivity and Theme in English, Part 2," *Journal of Linguistics* 3: 2, 199-244.
- Inoue, K. 1982. "An Interface of Syntax, Semantics, and Discourse Structures," *Lingua* 57, nos. 2-4, 259-300.
- Jackendoff, R. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge Mass.: The MIT Press.
- Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Kuno, S. 1972. "Functional Sentence Perspective: A case Study from Japanese and English," *Linguistic Inquiry* 3: 3, 269-320.
- . 1979. "On the Interaction between Syntactic Rules and Discourse Principles," in G. Bedell et al. (eds.) *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha, 279-304.
- Ladd, R. 1980. *The Structure of Intonational Meaning*. Bloomington: Indiana Univ. Press.
- Leech, G. and J. Svartvik. 1975. *A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- Liberman, M. and A. Prince. 1977. "On Stress and Linguistic Rhythm," *Linguistic Inquiry* 8: 2, 249-336.
- Mathesius, V. 1961. *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis*, trans. L. Dusková, ed. J. Vachek. The Hague: Mouton, 1975.
- Murata Y. (村田勇三郎). 1982. 『機能英文法』東京: 大修館.
- Prince, E. 1981. "Topicalization, Focus-Movement, and Yiddish Movement: A Pragmatic Differentiation," *BLS* 7, 249-64.
- Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Rochemont, M. 1978. *A Theory of Stylistic Rules in English*. Ph. D. dissertation, Univ. of Massachusetts. Reproduced by GLSA.
- Schmerling, S. 1976. *Aspects of English Sentence Stress*. Austin: Univ. of Texas Press.
- Selkirk, E. 1978. "On Prosodic Structure and its Relation to Syntactic Structure," Reproduced by IULC, 1980.
- . 1984. *Phonology and Syntax: The Relation between Sound and Structure*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Yasui, M. (安井睦). 1978. 『新しい聞き手の文法』東京: 大修館.

「文末焦点の原則」について*

時 崎 久 夫